寛哉、怪我人養生小屋建、弟子共日々出養生、幷風邪を受しものへ施藥いたしたり、

〔德川禁令考二十八救恤使〕安政二卯年十月

地震後町奉行巡見幷御赦等之事○中略

御赦小屋取建

地震幷出火ニ而類燒致候野宿之窮民共、御救之ため、淺草廣小路、幸橋御門外、深川海邊町續江小屋取建候間、野宿之もの勝手次第、右小屋江願出候樣可致候、

右之通、町々江申觸候樣、支配之名主共江早々可申通、

卯十月

右之通、御掛御役人中被仰渡候間、御支配町々野宿罷在候者之內、御小屋入相願候者、幸橋御門外御小屋場ハ、明後六日夕刻より、其外貳ヶ所ハ、明五日夕刻より、最寄勝手之方江願出候樣、急速御申渡可被成候、御救筋之儀ニ付、吳々も御組合限、行屆候樣御取計可被成候、此段御達申候、以上、

卯十月四日　町會所年番　同增掛年番

○按スルニ、震災救恤ノ事ハ、政治部上編賑給篇、及ビ下編救恤篇ニモ見エタレバ、宜シク參看スベシ、

賜假

〔享保集成絲綸錄二十九〕元祿十六未年十一月

今度地震にて、自分罷在候家潰候面々者、類火にて休候日數之半分、休可申候、以上、

由地震恩赦

〔日本紀略十四後一條〕長元五年三月五日丙子、詔、大赦天下、大辟以下罪、常赦所不免赦除、又免調庸、老人僧尼給穀、依攘天下地震雷鳴之怪異也、